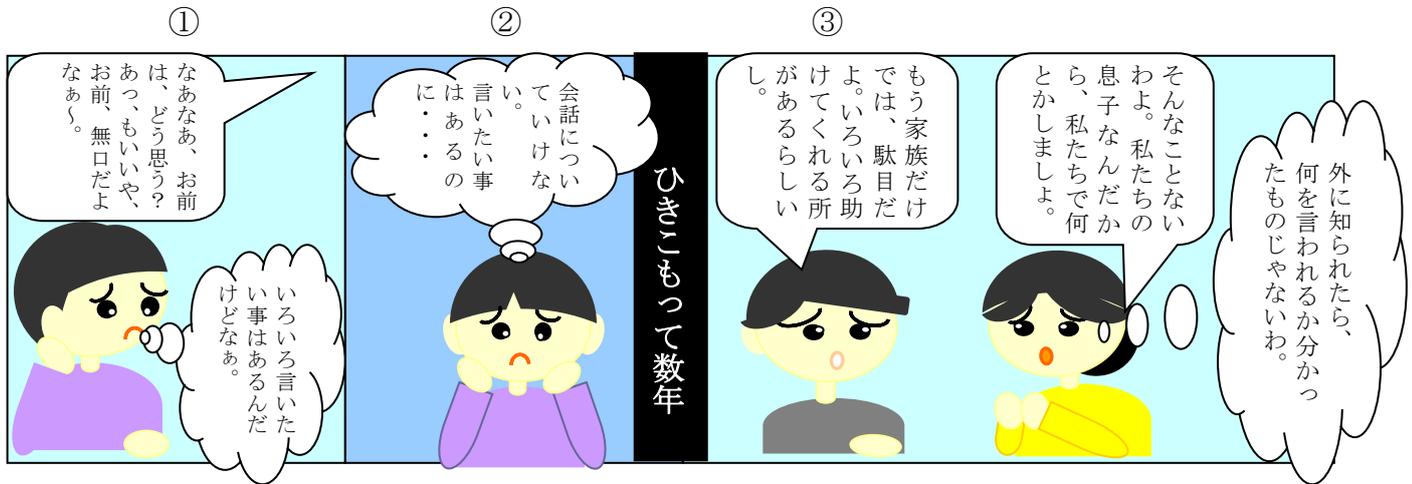


6. 事例5: 何となくコミュニケーションがとりにくくなり ～家族以外に協力を求めるのは勇気が要ること～

特定非営利活動法人 ライフ・ぷらす
服部 真



<概要>

A君は中学校の途中までは、控えめながら友達とも普通に会話や遊ぶ事ができた。

しかし、徐々に友達との接点が少なくなり、高校に入ってから多少の友達は出来たが、すぐに付き合いなくなってしまう。高校も休みがちではあったものの、専門学校に無事合格し進学するが、学校ではクラスメートと上手くコミュニケーションがとれず、徐々に休みがちになる。

落ち着きがなくなり、うまく会話ができなくなった。

言葉は喉まで来ているのに、声に出そうとすると不安にかられ喉がつまるようになった。

次第に人との関わりが少なくなり、下宿先のアパートからあまり外に出なくなった。

父親から支援団体等に相談する事を提案されるが、母親が外に話すことを嫌い、なかなか外部に相談する機会を得なかった。

ひきこもり状態で2年が過ぎた頃、父親が独断で支援団体に相談。母親もなすすべが無く了承した形ながら支援がはじまった。

支援者は、A君とのドライブを提案。しばらくの間、支援者だけが話している状態のドライブが続く。

次第に支援者にも慣れはじめ、会話に少しずつやり取りが出来るようになった。

最初は支援者の問いに答えるだけだったが、半年ほどの期間を経て自分の事、感じた事、好きな物なども徐々に話せるようになった。

支援開始から8か月ほど経過した頃、いづらか自分を見つめ直す事ができたようで、これまでの後悔、これからの不安、現状の打開策など、話が徐々に前向きな方向に向き始めた。

一つ一つの話をつくりと確認しながらさらに半年をかけて、心の準備をした彼は、学校へ復学した。

<この対応はダメだった>

★身内の「他人に知られたくない」という気持ちから外部への相談を躊躇する。

第三者の介入が必要な時があります。

身内だからこそ、感情的になってしまい解決できない場面では、外部の支援機関への相談も状況改善を早める一つの手段となりえます。

★本人の状態を理解する環境が無かった。

家族との会話も少なくなり、兄には自分の状況を責められる状態でした。

次第に家族へも「解ってもらえない」「自分なんか・・・」という気持ちから、ますます心を閉ざしてしまいます。

<こんな対応が良かった>

☆ドライブすることで、安心して会話できる空間を確保できた。

外出とはいえ車内は密室で、本人は比較的安心できる場所のようです。

車内なら、座席も向き合っているわけではなく、支援者が運転していればなおさら、会話がとぎれてもあまり違和感がないので、一つの会話について答えるにしても時間がかげられますし、答えられなくてもそう気まずくならず済みます。状況にもよりますが、ゆっくりコミュニケーションしてゆく中で、信頼関係を確立していく事が出来ました。

☆興味の手てるものを題材に話す

本人が興味のある事には、比較的多く、その話題に触れてみる。

自分の知らない事の時もありますが、そんな時は教えてもらうスタンスで聞いてみると、意外と言葉が返ってくる事が少なくありません。

☆一緒に体を動かす。

本人の状況にもよるので一概に言えないところもありますが、このケースでは本人が運動不足を自覚していた事もあり、好きなスポーツを遊びとして実施しました。一緒に汗をかく事、そういった時間を共有する事で信頼関係が深まり、より踏み込んだ会話ができるようになります。本人が嫌がらない限りは有効な手段です。

